

3. 各学習分野から 「3年間の成果と課題」 (ことば)

ことば部は、育てたい公共性リテラシーとして「対話力」と「語彙力」の2つの柱を立て、「ことばで分かり合える力」をつけたいと考えている。「対話力」は、聞いて応じ返す力、人の考えを理解し自分の考えと比べ判断する力、自分の思いや考えを相手に理解してもらえるように表現する力を対話を通して育てていくものである。また、「語彙力」は単に語彙の数を増やすということではなく、日本語の響きを心地よく感じる感性や日本語の意味あいの理解、ことばを身につけ使おうとする態度である。「対話力」も「語彙力」も、ことばにかかわろう、積極的に獲得しようという態度を含めて考えている。授業の中では、一方的に話を聞くとか話をするといった一方通行ではなく、1対1や小グループの中で、あるいは1対多であっても対話を大事にしてきた。「語彙力」も対話を通して身につくものだと考えている。「対話力」「語彙力」に着目して授業を進める中で、見えてきた子どもの姿がある。

低学年ではまず、1対1の対話を多く取り入れることで、安心して話ができるようにすることが大切である。自由に話をし、自由に質問をして答える中で、お互いに相手にわかるように話をするという態度が身についてくるはずである。授業の中では、子ども同士のことばが直接つながるのは難しいが、先生と子どもが一緒になって話し合う中で、集団の力によってズレをみつけながら、言葉1つ1つの意味を明らかにしていき、やがて子ども同士の対話を通して、イメージを共有していこうという、「ことばで関わる」子どもの姿がみえてきた。友だちの発言に「あー」と共感する声が上がったり、友だちの考えをことばで言いかえたりする応答する姿も見えてきた。同時に低学年のうちに、ことばで人とかわらうとしたり、自分からことばにかかわらうとしたりする構えができていないと一人一人の中で思考が深まっていかないこともわかってきた。

中学年になると、「ことばをつないでいく」姿が見えてくる。話し合いの輪から少しはずれたような発言でも、簡単に直感で否定するのではなく、自分の意見や友達の発言につないで考えたり、言いかえて補ったりする姿も見えるようになってきた。少人数グループの中での話し合いでは、役割分担もして相手の立場を踏まえての発言が出てくる。また説明するとき、相手にわかってもらえるように相手にイメージをもってもらえるような言葉を探し、「自分のことば」で語ろうとしている。そしてそれを聞き取って考えを深めようとする姿勢も見え始めている。「ことばをつなぐ」ことは、友だちと違ったものをつなげていくということで、公共性を考える上で大事な力である。

高学年では、少人数の話し合いはより活発になり、対話をする中で新しい考えが生まれてくる。友だちの考えと自分の考えを比べ、共通するところ、違っているところを明らかにしながら自分の意見を主張する。説明するときには他の学習分野の研究授業の中でも見えてきたように、例をあげたり、比喩を使ったりして、ことばを選んで相手に納得してもらえるように話そうとする姿が見えた。さらに、考えや立場の違いを理解し、多様な考えを受け止め結びつけていく力を意識して実践を行っている。友だちの意見を取り入れて自分の考えをことばで言いかえたり、自分の考えの変化とその理由をまとめ直していったりする姿も見られるようになってきている。

子どもの姿からいくつかの課題もみえてきた。

1つめは、「聞く力」である。聞く力は、対話力の前提として大事にしていることだが、育成プランの中でも未整理なところもあり、子どもの定着にはバラツキがある。「聞く力」は低学年だけとか1年で終わるというのではなく、学年の発達段階に合わせて1年1年積み重ね、継続して取り組みたい。

2つめは「質的な変容をうながすような授業づくり」ある。

異なる意見を受け止めた上で、自分はどうか考えるか、どう表現するかという質的な変容を促すような授業づくり、子どもが自分の変容を自覚できるような学びの環境づくりをしていくことが課題であると考えている。

「3年間の成果と課題」（市民）

「市民」部では、本開発研究で、子どもたちに社会的価値判断力や意思決定力を育むことを目指してきた。現代社会では、価値観の多様さが原因で解決できない問題が増えてきており、確かな社会的価値判断力や意思決定力がわたしたちに求められている。そこで、授業では、他者との差異や葛藤を感じるように、以下の3つの場面設定の問題に出合わせ、意図的に、社会的価値判断力や意思決定力を育むことにした。

- 【タイプA】 時事的な社会的論争をとまなう社会的事象の中、 } 「他者との差異や葛藤を感じる
【タイプB】 社会的事象を通して、子ども同士の関係の中、 } 問題」を扱う内容
【タイプC】 子どもがプランや提案を創造しながら「他者との差異を認め広げる」内容

(1) 成果

上記の考え方により、話し合いを多く取り入れる授業を展開することで、

- ① いろいろな価値観に出合い、その価値について多面的に考えることができた。
- ② ものごとを分析的に見たり、総合的に見たりすることができた。
- ③ ものの見方・考え方の基礎を培うことができた。

社会的な問題の解決や政策の選択においては、必ず不利益を被る人々がいることに気づかせる内容を【タイプA】で扱い、「社会を見る3つの目」を育てる授業を行ってきた。子どもたちには、「生産者から消費者へ」のように立場を変えて一つの物事を見たり、社会的論争の解決策に優先順位をつけたりすることで、様々な価値について考える機会をもたせた。その中で葛藤しながら、社会的に望ましいと考える判断や意思決定をしていった。

【タイプB】では、学級内の子ども同士で、相手を説得するために、情報を取捨選択したり、わかりやすく情報を加工したりして提案したり、その提案に対して質問したり反論したりすることができるようになった。また、【タイプC】では、子どもたちが自分の創造性を発揮して、アイデアを考えて交流しあえることで、「友だちはどんな考えをもったのだろう」と、差異を楽しむ学習が展開できた。

このように、類型化することで、教員は、子ども同士の差異に葛藤させながら判断を迫っていくのか、子ども同士の差異を楽しませる方向に展開させるのか、場面設定のタイプに応じて、意図的に育てたい力を考えながら、授業展開を行った。

(2) 課題

当初、社会的価値判断力、意思決定力、「社会を見る3つの目」を「公共性リテラシー」ととらえ、これらの評価の仕方がずっと課題であった。現在では、社会的価値判断力、意思決定力の活動を通して育てる以下の4つ能力を、「公共性リテラシー」と定義している。

ア：社会的事象や、観察したことや資料を正確に読み取り、論点を取り出す。

イ：読みとったことを、自分の主張の根拠にして、意見を述べたり提案したりする。

ウ：多面的（他者の視点）な見方を考える。

エ：なるべく多くの人々が幸せになれる条件を探して、折り合い、決定する。

「社会を見る3つの目」こそが市民ならではの能力で、現在は、目標の一部と考えている。

さて、これらの4つの「公共性リテラシー」の高まりについては、子どもたちが、ノートに記述したことを中心に評価を進めている。直観的には、この4観点で能力の高まりを評価できると考えているが、未だに実践的に論証することができないでいる。それが今後の課題と受け止めている。

「3年間の成果と課題」（算数）

(1) 成果

① 公共性育成プランと公共性リテラシー

公共性育成プランで、それぞれの発達段階における「領域ごとのねらいと内容」を明確にすることができたので、それを念頭において授業を展開することができた。また、公共性育成プランで、それぞれの公共性リテラシーについて求める「子どもの姿」を明確にすることができたので、そのための教材、授業構成を考えて授業を展開することができた。

② 「算数的想像力」（算数部テーマ）と公共性リテラシー

算数部のテーマとして取り組んできた「算数的想像力」は、育てたい「公共性リテラシー」の中のウ「友だちの考えを図や式・ことばから理解し、自分の考えと似ている点やちがっている点を明確にする力」、エ「様々な解決の中から、話し合いを通して、課題場面に適した方法を判断する力」などに関わりがある。「算数的想像力」の育成に取り組んだことが、公共性リテラシーの育成にもつながったと考えられる。

さらに、算数部で継続的に取り組んでいる「課題を見つける力」の育成が、育てたい「公共性リテラシー」のオ「学習したことを整理し合い、疑問やさらに知りたいことを出し合いながら新たな課題を見つける力」の育成につながった。

③ 子どもの変容

育てたい「公共性リテラシー」の中では、特にア「既習事項や日常生活、友だちの疑問等から自分なりの課題を持ち、解決に取り組む姿勢」、エ「様々な解決の中から、話し合いを通して、課題場面に適した方法を判断する力」などが育っていることが授業研究会などを通して確認された。

イ「自分の考えを図や式・ことばを使って友だちに分かりやすく伝える力」については、発達段階ごとに下位目標として設定した「子どもの姿」では、低学年は「自分なりに解決し、その方法を図や言葉で書いたり話したりする」、中学年は「自分なりに解決し、その方法を読んで分かるように書く」、高学年は「自分なりに解決し、その方法を他者が読んで分かるように書く」となっている。どの学年も話すことよって伝える力は比較的ついてきていると言える。しかし、「読んで分かるように書く」ことは、まだ十分に力がついているとは言にくい。

(2) 課題

① 表現力、判断力の育成

育てたい「公共性リテラシー」のイは表現力、ウは判断力につながる。これらの力を、さらに伸ばすことが課題である。特にウは算数的想像力とも関わるので、双方の育成を意図した指導法や授業構成をさらに探っていく必要がある。

② 「公共性」育成プランの各発達段階での「領域ごとのねらいと内容」と「子どもの姿」の妥当性についての検討、修正

「公共性」育成プランの各発達段階での内容とねらいを示した「領域ごとのねらいと内容」、「子どもの姿」は、その妥当性が検討されていない。1年間の各学年での実践を振り返り、必要に応じて修正を加えていく必要がある。

「3年間の成果と課題」（自然）

『公共性』を育むシティズンシップ教育」というテーマの基に「友だちとの違いを排除せずに、理解し考える力を発揮する」という子ども像が学校の共通理解となった。「公共性」と聞き、社会科的な市民教育・道徳教育を思いうかべ、自然科学とは遠いのではないだろうか、という話も当初部会では出てきた。「公共性」という内容を教えるのではなく、「公共性」が育成されるような授業になるように方法でアプローチしてみることもとなった。つまり、授業中に話し合いなどを行い、友だちの意見をよく聞き、違いを認め合う。そして、実験方法において自分たちで考えた方法を試み、それを互いに認め合い、実験結果を発表し、共通のデータとして扱い検討していく。そのような子どもたち・学級集団を形成していくことを目的とした。

【公開研究会より】

1年目は、「公共性」と「自然科学」との関わり方や我々が目指す子ども像がはっきりと参会の先生方に提示することができず、研究不足を反省した。そこで、育成プランを作成し、自然部が目指す公共性リテラシーと発達段階に応じた話し合いのポイントを明らかにした。

2年目は、自然科学が担う重要な目的は「公共性」以外にあるのではないかと、話し合いも大切ではあるがもっと力を注ぐ点があるのではないかと指摘を受けた。自然界の様々な法則を理解すること、その過程において科学的・論理的な思考力を育成することなどが「理科」という教科に課せられた重要な目的であることは明らかである。しかし、子どもは、ほかの子どもの表現をまねたり、批評したりすることにより、自分の考えや表現力を深化させていくものではないだろうか。話し合いの場において、自分が気づいていなかったことや新たな知識の発見があり、子ども同士の意見交流による学び合いによって、学習の意味の深まりを実感するのではないかと考え、「話し合い」は、自然科学として「理科」を学習する上で、重要であるとした。

【成果】

実験を行う班を「研究所」と名付けたことによって、子どもたちは自覚を持って実験に臨むようになった。自分の研究所の考え・実験方法・考察に責任を持ち、一人一人がよい結果を出したいと意欲的に活動した。自由に実験観察を行う中で、友人と協力したり、また、自分では気づけなかった方法で行ったり、新たな発見があった。他者の意見・他者の気づきではあるが、それを素直に認め、自己の知識・気づきとして認識し、自分の学びを深めていく様子が、授業中によく確認された。また、事実（実験観察結果）を元に考えることを徹底させたので、知識を優先させたり、日頃の友人関係に左右されることなく、発見した事実・結果からの考察は誰の意見でも認められる学級集団が形成されてきた。まさに、違いを理解し考える力が育成されてきたと考えられる。

【課題】

意見交流の場で自分の考えの表現が苦手な子への配慮が必要である。言葉や絵・図で表現することなども勧め、自分の得意なもので表現させるように働きかける必要がある。また、学習課題に対する子ども一人一人の思いと、班（研究所）の活動にずれがある場合に一人一人の意見を生かしていけるようになってだても必要である。そして、話し合いに重点を置くことによって、自然科学の学習観点から逸れてしまうことがないように、「公共性の育成」と「事実のから学ぶ」ことの両方の観点から学習を進めていく必要がある。

「3年間の成果と課題」（音楽）

音楽部では、「公共性」を育てるため、学習方法・場の設定・学習材の工夫を重ね、その中でも特に「他者と関わりあって表現を交流する場」を意識して設定してきた。

(1) 成果

〈低学年：からだで楽しむ ～わらべうたあそび・リクエストによる歌唱活動～〉

わらべうたあそびでは、からだまるごとで音楽を楽しみ仲間とともに気持ちよく遊ぶことを大切にしていた。ルールを覚えるだけでなく、あそびの中で葛藤しながらも他者とともに活動する喜びを子どもの姿からみとることができた。からだを通したあそびをたくさん経験することで、他者との関わりで自らの思いを表現しようとする姿勢が生まれ、やがて即興的な音楽づくりも意欲的にむかう様子が見えてきた。また、リクエストによる歌唱活動には、自ら選びそれを仲間に表明することができる公共空間がある。選ぶ者と、それを聴きともに歌う者との間にやわらかな空間が生まれる。子どもからは、自分が選曲した曲を仲間とともに歌う心地よさや、選曲からその子らしさを感じている様子が見えとれた。曲に対しての快・不快さも含め、曲に対して何らかの興味を持ち、音楽経験を広げていることがみえてきた。

〈中学年：お互いの表現を聴きあい、交流しあう ～多様な文化にふれる～〉

中学年では、国内外の様々な音楽文化と出会う場を多く設定した。各地で営まれる音楽、そこで用いられる楽器に直に触れ、自由に用いて楽しんだり、型をなぞって真似ながらその文化に近づく姿が見えた。それはまた、自分と他者の考え方の違いに気づく機会にもなった。このような音楽活動を重ね、互いに触発しあったり、批判・賞賛をしあったりする中で、自分へのこだわりを持つ姿や、他者を排除せずともに学びを深めていこうとする姿が育っていることが明らかになった。

〈高学年：自らの学習に責任を持ち、よりよい表現をめざす ～ミュージックプランに基づく学習～〉

高学年では、自らが学習を設計する、ミュージックプランに基づく学習を日常的に進めてきた。特に「他者の表現を味わう感性」や「自らの学習を設計し、自立的に活動していく構成力・判断力」の育成に効果的である事が、子どもたちの姿からも明らかになった。自分のお気に入りを選び、試行錯誤しながら仲間とともに演奏していくことを積み重ねる中で、質は高まる。作品を他者と相互交流し、触発しあう批評空間の中でさらに個々の思考が高まり、よりよい表現を次に活かそうとする姿が見えてきた。多様な楽器・もの・人・環境から「おもしろい」と感じたことを自分の表現に活かそうとする姿、それは新たな学習に参加していくことであり、そのことこそが学びであると考えている。

〈音楽における他者の存在〉

音楽には常に「他者」がいるということ。「ともに」の有りようが音楽ならではの特徴的な公共性を示す場合もあることが見えてきた。また、「合意形成に至る葛藤のプロセス、それを大事に取り組んでいることがわかった」という授業研究の感想からも、子どもたちの姿に、公共的に学ぶ姿が表れていたといえよう。

(2) 課題

〈音楽文化の持つ価値と個々の興味をどのようにつなぎ、高めていくか〉

友だちの演奏を受けとめる、触発される、新たな表現に対し欲求が生まれる、活動に参加する。このような経験を通し、積み重ねることで、自らの思考を深め、高めようとする探求力が育つのではないか。教師は、一人の子どもがどのように変容しているのかを日々の授業の中でみとり、長いスパンで育てる姿勢も大切にしたい。さらに音楽の独自性を活かし、ともに響きあいながら学ぶことができる公共空間についても考えていく。また、我が国の伝統音楽や国際的な楽器と触れる経験を通して、音楽に序列はないことや自分とは異なる音楽を受け入れる身体、どんな音楽も排除しない寛容さを、「音楽での公共性」と捉え、探求していくことも課題である。

「3年間の成果と課題」（アート）

○成果

研究開発1年次，“公共性を育む”という課題に対し、「私」性を追求していく「アート」の立場としては、テーマに近づき難い出発点であった。そこで「アート」独自の学びを考慮し、育みたい「公共性リテラシー」を、身体性／自分らしさの探求／他者の尊重／共感／相互交流／の5点から捉え、授業改善に活かしてきた。また、これらの要素を授業デザインとして組み込んだ学習のあり方を「アトリエ的学び」とし、研究の足場とした。本研究では、各分野共通にめざす子どもの姿として、「他者の異質性を評価・批判しあいながら関わる中で、他者の視点をもって自己を主張できる子ども」を挙げてきた。それに対し、「アート」の活動においては、子どもの「思い」は批判に値しない、という理解のもと、批判能力を発揮する以前に、共感的に受けとめあうことを基盤にしてきた。

2年次、どの学習にも共通する「公共性リテラシー」の要素として、共感・賞賛・批判・提案のキーワードが共通理解された。これらは、対人関係において発揮されるものとしての捉えであったが、「私」性に着目し続ける「アート」では、自分らしさを求める際に、自己内対話として欠かせない要素であると考えた。つまり、共感・賞賛・批判・提案が自己内対話として往来する過程で、もう一人の自己をつくり出し、「私」自身に深く向き合える子どもは、他者との関係においても望ましい「公共性リテラシー」を発揮できるのではないかと仮定した。

3年次、さらなる題材開発及び実践の意味づけを行ってきた。例えば、6年生では「なりきりアート」と題し、1チーム4人各自が立場の異なる役割（プロデューサー・カメラマン・スタイリスト・モデル）を引き受け、協働して歴史上の人物になりきるというプロジェクト学習である。違いを活かしあい、共に表現する楽しさと充実感を味わう子どもの姿があった。また、これまでの「アート」実践をもとに、育みたい「公共性リテラシー」をあらためて吟味し、「公共性」育成プランを作成した。その中で抽出されたリテラシーは、自分らしさの探求／違いを楽しむ／想像力を働かせる（他者の立場に）／の3点である。これらを低・中・高学年それぞれの段階において、実際の実践と照合しながら、具体的に子どもの姿として位置づけられたことは、プラン作成を通じて得られた成果である。

このように、初年度は「アート」の立場にとって馴染みのない研究テーマに思われたが、「アート」本来の学びに即し研究の本質を求めてきた中で、3年次の現在、「アート」が発信すべき「アート」ならではの「公共性リテラシー」が明確になったことが大きな成果といえよう。

○課題

・「公共性」育成プランの活用

子どもの学びをみとる際の指標として「公共性」育成プランを活用したい。実際の子どもの姿を育てたい「公共性リテラシー」に即して読みとり、子ども理解や授業改善につなげる。また、「アート」の学びの要件に沿ってマッピングした実践例は、今後の題材開発における足掛かりとしたい。

・「公共性」の集団的拡充

4人程度の小グループ学習形態では、公共性に通じる課題意識をもって取り組む子どもの姿が認められるようになってきた。しかしながら、学級などの集団における公共空間の成立に関しては、未だに課題が残る。そこで「アート」独自の学びの空間として、「共視（joint attention）」によって起こりうる心情的交流を契機とした公共空間に着目し、その可能性を集団的拡充の点から探りたい。

「3年間の成果と課題」 (生活文化)

(1) 成果

昨年度は授業実践の中で、ふだんは消費者として生活している子どもたちにももの作り手の立場に立って商品開発のアイデアを考えさせたり、いつも食事を作ってくれる家の方に自分たちがおかずを作ってみようと投げかけるなど、違う立場に立ってものを考えたり行動したりする場面を設定して学習を展開した。「立場の転換の発想」は子どもたちに伝わりづらく、課題となって残ったものの、グループ内あるいは学級全体の発表の場では活発な議論が行われ、友だちの意見に共感したり、賞賛、あるいは批判し合ったり、またなんとか折り合いをつけていこうと新たな提案を行ったりする子どもたちの姿が見られた。

今年度は、生活に根ざして学ぶ生活文化の特色をより一層生かし、ひとりひとりの生活の背景が異なるということが学習の前提となり学びの原点となるような学習の展開を考えた。

6月に行った初めての調理実習「いり卵作り」では、冒頭、子どもたちを毎日の給食調理に情熱をかけてくださっている身近な調理の名人と出会うことにした。名人の調理にかける思いや工夫を伝えていただく中で、「調理実習を単なるイベントではない学びにしたい」というかねてからの授業者の願いを実現したいと考えたのである。

授業では、子どもたちがまず自分の家のいり卵の作り方を取材してきて、紹介し合った。ひとつとして同じ作り方をしている家庭はなく、調理器具が違っていたり、加える調味料が少しずつ異なっていたりすることに、まず子どもたちは驚いた。そして名人が示範したいり卵の作り方は、さらに子どもたちがあらかじめ家で調べてきたどのやり方とも異なっていた。ここで既成概念を崩された子どもたちは、自分との「違い」を排除することはなく、「本当にあのやり方でできるのか」と驚き、同時に「やってみたい」という活動の意欲が引き出されていた。この実践では、今まで持っていた概念との「違い」と、「できそうだ」という期待感とが、子どもの学びの意欲を喚起していたといえる。自分と違うものに触れることで生活経験は豊かになり、次なる実践への行動意欲を高める可能性が示された。

また、子どもたちがグループ活動をしている様子を教員同士が見合い話し合う中で、「公共的なかわり」の姿を明らかにできたことは成果である。それは、グループの皆が同じ作業をしている姿とは限らない。それぞれがお互いを信頼しつつ、チームが目的を達成するために自分のできることをする。グループの皆にとって価値がある活動をしている姿ととらえた。

実践を重ねるうちに分かってきたことは、違いを排除せず、むしろ違いを生かす学びを展開するためには、友だちの話に耳を傾けその意見を共感的にとらえる姿勢が不可欠だということである。学級に仲間を信頼してものが言える土壌がなければ、子どもたちは本当に安心して他者と異なる自分を表現することはできない。互いに尊重し認め合う仲間、ありのままの自分を語ることでできる学級の雰囲気一実には基本的なことであるが、こうした学びの場作りが公共性リテラシーを育む基となる。

ルノーと日産という異なる会社のトップを務めるカルロス・ゴーン社長は、両者の関係がうまくいっている理由を尋ねられて次のように答えている。「違いを尊重すること。人間関係も同じで、違いに敬意を払わないと、自分が成長する可能性をみすみす逃すことになる」(読売新聞平成22年12月18日付)

(2) 課題

友だち同士の学びあいは「公共性リテラシー」育成に深くかかわっている。先に例を挙げた調理実習では、子どもたち同士が我が家流のいり卵について交流しながら活動したり、それぞれの手元の作業を見ながら学び合ったりする場面が見られなかった。それは、生活背景の違いを学びの原点とするという目標を掲げたにもかかわらず、協働作業に対する教師の意図的な働きかけがなかったためである。実際の授業の流れの中で、初めての実習であった子どもたちに余裕がなかったこと、授業者も安全に配慮することが精一杯であったことも否めない。今後の授業に生かしていきたい。

「3年間の成果と課題」（からだ）

(1) 成果

① 公共性育成プランの作成

からだ部では、1年次に「子ども自らが、感情に左右されやすい自分の言動を、いかにコントロールできるようになるかを意識すること」が「公共性」を育む第一歩と考えてきた。すなわち、子どもたちの「公共性」の育ちを友だちとの関わりの中でみとっていこうと試みたのである。そこで、学習分野のテーマを「違いを認めあい、生かしあう」と設定し、実践の中では個人差に着目することで、仲間同士の有機的な関わりをどのようにして生み出すかということが模索された。

2年次には、全学習分野に通底する「公共性リテラシー」の要素として「共感」「賞賛」「批判」「提案」の4つが共通理解された。「からだ」では「公共性」を育む際に次のことを大切にしたい。1) 感触や感覚など「自分のからだで感じる体験」を大切にしたい。2) 「友だちとの関わりあい」を重視したい。3) 「その運動をすることの意味や価値」を考えさせる。4) 「運動を楽しむ」自主性や創造性を育む。保健分野においても特に「仲間と関わりあうことを通して他者の体への理解を広げ、互いの良さを生かしあう判断力・認識力」の育成を念頭に、運動領域との連携を意識した実践を行ってきた。

3年次はこれまでの成果と課題を整理すると同時に、もう一度それぞれが持っている教師観や指導観を基に「どのような子どもを育てたいのか」ということを十分に議論することからスタートした。そのよう議論を経て、抽出された公共性リテラシーが、「ア：体の感覚や運動の本質的な楽しさを感じる力」「イ：体を通して、仲間と関わりあう力」「ウ：感覚や考えを体を通して伝え、仲間を受け止める力」「エ：仲間とともに工夫し、作り上げる力」「オ：体を通じた経験や知識を生活に生かそうとする力」である。「からだ」では、学習分野の目標を達成するために、他者との感覚の交流（共感）が中心になる授業作りの必要性を提案している。そのプロセスの中で公共性リテラシーが育つと考え、公共性育成プランの中心に「感覚」を据えることにした。そして、公共性育成プラン上に、系統性を考えた領域名や具体的な活動場面を配列し「公共性育成プラン」を完成させた。

② 公共性を育む「からだ」の授業作り

運動分野では、他者との感覚の交流（共感）が中心となる授業実践の例として4・5・6年生の「水泳」を挙げたい。「水泳」の授業づくりで大切にしたいことは、子どもたちが大枠のテーマを介して対話を行い、自分たちなりの動きを共有する時間や空間を設けたことである。授業者は、近代泳法を一方的に伝達するのではなく、子どもたちの感覚を大切にすることを心掛けた。実際の授業では「自分なりに見つけた動き」を友だちと共有し感覚を伝え合うことで「動きや感覚を楽しんでいる」姿がどの学年でもみとることができた。

保健分野では、6年生の「たばこの害を考える」授業の中で公共性の育成を試みた。授業の中では、他者の意見を認識し、自分の考えを判断し直すという場面を設定した。子どもたちは、友だちの考えを聞きながら共感したり批判したり賞賛したりする。その過程を通過して自分の考えを提案する。そして教師側が示す知識を得た上で再度自分の考えを練り直していく。最終的な判断は子どもに委ねられるが、どの子も獲得した知識をもとに自分の考えの根拠を示すことができたようにみとることができた。

このように「からだ」で育てたい「公共性リテラシー」を共有しながら授業作りを行い、互いの実践を見合う際に同じ視点を持つことができたことも成果の一つである。

(2) 今後の課題

今後は、公共性を育む具体的な手立てや教師の役割に焦点を置き、「からだ」ならではの公共性リテラシーの確立を目指したい。また、お互いの授業の中で子どもの姿をみとり、教師同士が語り合う時間を共有することを続けたい。「授業は教師と子どもで創るものである」という考えのもと、教師の公共性を育てることが子どもの公共性を育むことに繋がると考えている。